

56年前東京招致に尽力

今から56年前にあった東京五輪の招致に、御坊市ゆかりの日系アメリカ人が尽力した。後に同市の名誉市民1号にも選ばれた故・和田勇氏（1907～2001年）だ。自分以上に他人に奉仕する「超私の奉仕」の精神を貫いた。

【山本芳博】

和歌山から
支える五輪



⑤

御坊市によると、和田氏は米国生まれ。家計が苦しく、4～9歳の幼少時に、両親の実家があった御坊市や由良町に預けられた。お互い助け合っ



和田勇氏

て漁をし、魚を分かち合

う漁師町の様子が、他人に奉仕する和田氏の人

形成に影響したのだという。米国に戻ってロサンゼルスでスーパーを経営し

御坊ゆかりの日系アメリカ人 故 和田勇氏

の北岡和義さん(78)は現在東京在住。和田氏から当時の誘致活動の話聞いた数少ない人物の一人だ。

中南米を巡った時、和田氏は各国の国際オリ

ピック委員会委員の妻に、まず日本の着物をプレゼントして心をつかんだのだという。相手の婦人にまでいたる細かい配慮は、「和田氏が日本で

妻正子さんも和田氏を支えた。和田氏は日本語で手紙を書くことが苦

で、招致活動の状況を東京へ報告する際は、正子さんが代筆した。

東京五輪招致に活躍した和田夫妻。ただ、和田氏が自ら功績を語ることはなかったという。北岡

さんは「自分の手柄を周囲に吹聴するような人ではなかった」と振り返る。歴史上、取り上げられる機会が少なかった和田氏だが、2020年の

東京五輪を前に、御坊市がその活躍に再びスポットライトを当てている。米国に住む和田氏の次女や親戚が来日し、

新たな交流が生まれ、東京五輪のネクタイなど和田氏ゆかりの品の寄贈も受けた。

御坊市や御坊商工会議所などでつくる「和田勇顕彰会」の岡本恒男事務局長(65)は「五輪を実現させた和田氏の偉業を知ってもらいたい。若い人たちには新たに迎える新しい五輪が成功するよう、少しでも力を尽くしてもらえたらうれしい」と話す。 〆〆〆



和田勇氏の遺品である1964年の東京五輪のネクタイなど―御坊市蔵で